特249
676

本願の宗教

始

特249
676

本願の宗教

帝國圖書館藏

序

「本願を信じ念佛をまうせば佛になるそのほか何の學問かは往生の要なるべきや」まことにそれは單純至極なるたゞ一すぢの道である。しかし私にとりては祖語のごとく、この一道は難中の難この難にすぎたるはなき極難信の法である。はてもなく限りもなき昇道無窮極の道である。

しかしこのはてしなく限りなき道にのぼるべく選ばしめられた本願のはからひを仰ぐとき、まことにおほけなさを感じて、餘生をあげて、否その時その刹那の自らの全部を擧げて、この生命の道をもとめさしていたゞきたいと願はざるを得ない。

私がこの道をかぎりなく、はてしなき道と感ずることすら自らの力ではなく懈慢の私に向つて限りなくすゝめの勅命と仰がるゝことである。

この一場の告白記は、この無限の道程の間の、たゞ一あしの痕跡にほかならぬものである。

これを公にするは、これによつて名師善友の叱正、鞭撻を仰ぎたいねがひに他ならない。

南無阿彌陀佛。

昭和八年十月

松原致遠

本願の宗教

（外的のすくひと内的のすくひ）

宗教に於ける「すくひ」

宗教といふものは人をすくふものである。―マアさういふ風に大體考へられて居るわけでありますが、基督教ならば神様がすくふ、佛教ならば佛様がすくふ、かう云ふ事に一應なつて居りますが、併し「すくひ」と云ふ事をよく考へてみますと、かなり込み入つたことになるのです。殊に、宗教に於て「すくひ」と云ふ言葉は、私の考へるところでは、當てはまらない、とまで思はれます。淨土眞宗に於ては、多くは、信心を頂くのもすくはれんが爲めである、念佛するのもすくはれんが爲めである、と解せられて居り、「信心」「念佛」と云ふものを、すくひの條件のやうに心得て居るやうでありますが、それは即ち、信心せざる人、念佛せざる人の思ふことで、本當

の信心の人、念佛の行者は、さう云ふ「すくひ」などゝ云ふ隙間のあるものはいらぬので、さう云ふ餘裕は無いと思ひます。本當に所謂、信心獲得し、念佛によつて生きると云ふ境地にまで這入つて行けば、すくひなんと云ふなまぬるいものは、更に要らないのでありませう。

すくふと云ふ事は、欲望を滿足すると云ふことに、凡そなつて居るやうでございます。語原は調べてみませんが、私の思ふところでは、いま人が水に溺れて居るのを、すくひ上げられると云ふのが語原で、大抵の場合欲望を滿足することを「すくひ」と言ふやうである。例へばお腹が空いて居る、御飯をよばれて「すくはれた」咽喉が渴いて居る、冷めたい水を一杯よばれて「あゝすくはれた」と云ふあんいばで、どうもすくひと云ふ事はさういふ意味らしい。欲望を滿足すると云ふことになるのであります。

そこで、欲望と云ふは何かと申すと、貪慾、瞋恚、愚癡で、それは佛敎に於ては、否定さるべきものである。佛敎の歷史が展開して來て、はからひなき宗敎の淨土眞宗が出來た以上、矢張り無我の原理が發展したものでありますから、貪慾、瞋恚、愚癡は、否定さるべきもので、それが滿足さるゝ事がすくひなら、それは佛敎ではない。現に眞宗に於ては、現世祈禱は禁ぜられて居りますが、それは現世であるから禁ぜられたのでない。欲望を滿足しようとする態度がいけないからである。困るから神、佛にたのんで「どうかして下さい」と言ひ、自分が不養生をして病氣になり乍ら「神樣、なんとかして下さい」と云ふやうなのは、神佛も迷惑で、それは結局、自己本位です。自分の欲望を滿足する爲めに、神佛を使ふと云ふ事になりますから神佛は第二義になる。さう云ふやうなのを「すくひ」と言ふて居る向があるのです。現世祈禱も否定すべきであるが、併し、一面に於きまして、極樂に詣らして頂くと云ふ考へ、死んで、樂しみづくめの結構なお淨土へ詣らして頂くのだと云ふのも現世祈禱と本質は同じものでありませう。その樂しみづくめ、結構と云ふのも矢張り欲望の滿足と同じものです。娑婆は面白くないから、極樂へ往つて、無上の樂しみをさして頂くと云ふやうなのは、決して宗敎的ではありますまい。元來、世の中が思ふやうにならぬと云ふが、思ふやうにしようと思ふから、思ふやうにならない。そこに苦しみ惱みがあります。が併し、この苦しみ惱みは自分の播いた種子を、いま刈取るのでございます。元來、苦しみ惱みがあればこそ、人間のたましひが磨かれて行くのです。人生が樂しみづくめであれば、魂は腐つて了ふ。面白い所ばかり求めて歩いて居るやうなものに、碌な人間は居りませ

ん。苦しみ惱むことの出來る人間であればこそ、苦しみ惱みが頂けるのである。赤ン坊や動物に苦しみ惱みは無いのです。あつても、それは精神的なものでない。人間は苦しみ惱みと云ふ魂の糧を頂き、それを喜び頂いて生きて行くところに、魂が肥えて行くのであります。然るに、それが厭やさに、懈怠になり、快樂をのみ求めて、この世は面白くないから、今度は結構な所に詣らして頂き、樂しみづくめの果報を得ようなどゝ云ふのは、どうもそれは、欲が深いと云ふか、無智と云ふも甚しい。

誤まれる願生心

元來かういふ人の心に描いて居る極樂は自分の樂みを得さして頂くお淨土でありますから、親鸞聖人が眞實報土といはれ、無量光明土と仰せられたやうな高い理想の境界ではないのでありますから、容易く行けるところのやうにおもふて居るのであります。元來理想も何もなく、食慾、瞋恚、愚痴の自分を、さほど悪いともおもはす、その欲望はそのまゝにして置いて、むしろそれをより多く滿足するために極樂へ行かうといふのでありますから、極樂もきはめて低い世界であります。それで「このまゝのおたすけ」などと云つて、このまゝでゆけると思ふて居るのであります。

そも〳〵「このまゝ」の自分が、よくないものであり、その不完全、醜悪、罪業深重、煩惱具足であることを信知し、悲痛する處にこそ彌陀の本願があり、淨土往生の道があるので、それを「このまゝのおたすけ」などゝ言ふ、これ程わけのわからぬ言葉はありませんが多くはさう云ふことを言ふて居るのであります。親鸞聖人にないやうなことば、むしろ聖人の否定せらるべきことばを自分の都合のいゝやうに造り出すのです。何れにしても、さう云ふ自分の個人的な欲望を滿足する爲めに、本願を使ひ、佛を使ふのでありますから、かう云ふ意味のすくひは、これは宗教的ではありますまい。

なぜ欲望が否定さるべきものであるかと云へば、この欲望の本質をよく檢べて行つてみるとそれは永遠にして、普遍なる意義のないものであります。必ず欲望は一時的のものであります。例へば、暑い時に、冷めたいものを飲む、それは暑い時だけで、寒い時には飲みたくない。冬は寒いから炬燵に這入りますが、夏期になつて炬燵へ這入つたら、堪つたものでない。欲望は必ず一

時的のものでありますから、これは決して永遠の意味の無いものです。だからして、欲望を追ふて居る生活は、決して永遠の意味ある生活ではない。又欲望は必ず個人的のもので、甲乙丙丁別々で、皆、異つて居ります。例へば、主人は旅行がすき、妻君は外出嫌ひ、姉は芝居に行く、妹はオペラ、と云ふ風に個人的だから、全部異ふ。それ故にこれは、普遍的のものでなく、全人類的のものではない。また欲望と欲望とは、必ず衝突をします。それをお釈迦様は、三千年前にハツキリ認めて「父は子の悪を説き、子は父の悪を説く、母は娘の悪をとき、娘は母の悪を説く、兄は弟の悪を説き、弟は兄の悪を説く、夫は妻の悪を説き、妻は夫の悪をとく、皆これ貪慾の爲なり」とおつしやつてあります。欲望が衝突するから、そこに闘諍堅固即ち爭ひが生ずる。だから、貪慾、瞋恚と云ふものによつて、現實の人生が形づくられて居り、またこの貪慾、瞋恚によつて現實人生は展開されて居ります。

結構なところへ行きたいといふお淨土まゐりは、即ち個人主義功利主義の願生は、その貪慾をたゞ未來へ延長すると云ふだけであります。かう云ふのを「すくひ〳〵」と言ふて居る。未來は結構な所へやつて頂く、樂しみづくめの淨土などゝいふて居るのは矢張り、貪慾の煩惱の變形もしくは延長であると思ひます。

すくひと云ふことに就て、宗教的の意味に言はれて居ることを申しますならば、基督教では造物主と云ふものがあつて、それが神であり、その神の愛にすがつて居れば、神が人間をすくふて天國へ連れて行くと云ふ、かう云ふのを基督教のすくひといふんでせう。基督教でも「すくひ〳〵」と頻りに申しますが、あの基督教のすくひと淨土眞宗のそれとは全然違ふのです。お釈迦様の時分に、造物主の思想が矢張りありまして、これを「大自在天」と言ふてゐた。自在であるから、人間が死ぬと天國へ引つ張つて行く、と云ふことになるのでありませう。併しお釈迦様はハツキリ言はれました。大自在天は大自在であるが、「彼來つて我となることあたはず」と。如何に大自在天が、自在であつても我となることが出來ない。この我になつて呉れないものが、我を根本的に救ふ理由は無い。例へば茲に、病氣をして醫者に診て貰ふと、醫者は藥を服まして治す。これは肉體的の救ひで、外的のものです。ところが心の苦みは他人ではすくへません。いま私の知人のお婆さんが、孫を亡くしまして、毎日悲しみに沈んで居られ、愚癡を言ふて泣いて居られるので、他の者が行つて、頻りに慰めてあげるが、慰められゝと、幾らか心が鎭まつたやう

だけれども、それは一時的に休められたのであるから、直ぐ淋しく苦しくなる。他の者が幾ら慰めやうが、どれだけ同情しようが、同情などゝ云ふ甘つたるいものを持つて來ても、何んにもならぬ。その時は、甘い同情で一寸陶醉するが、その後で直ぐ淋しくなり、苦しくなる。宗教は精神的のもの、內面生活でありますから、吾々の內面の苦惱——吾々の生そのものは苦惱であります——何が故に苦惱であるかといへば、生死無常、罪業深重。しづかに自己の心のすがた、人生の有樣をながめて見れば、三界安きことなく、猶し火宅の如しであります。自分も火宅であり人生も火宅であります。かういふ全人類的なる苦惱は外的に存在する神や佛によつてはどうすることもならないものであります。

この全自己を始末せんとし、人生を越えんとするねがひも、外にのみある佛によつては奈何ともすることはできないのであります。

外的の「すくひ」

それでこの大切な自分の魂とか、心とか、苦惱とか云ふものをほつて置て、死んでから極樂へ引つ張つて行かれさへすればよいといふのは、それは低級なる宗教であります。外的のすくひであります。のみならず、死後に自分一人の快樂を欲して居るやうなのは、このすくひたるや、甚だ感心せざるもので、かう云ふのを死に佛教と云ふ。

吾々佛教徒は、必ず人生を超えなくてはならぬ。貪慾、瞋恚、愚癡に終始すれば、それは動物生活です。彌陀の本願によつて、現實人生を超えしめられますが、この現實人生を超えることによつて、本當に人生に生きて意義があり、價値があるので、その意義あり、價値ある生活を創り上げて行くのが宗教で、それは本願によつて人生を創造すると共に永遠の生命を獲、本願に導かれて眞實報土に到るのである。さう云ふ人生的の要求も全く自己の始末をせんとする願ひもなく、たゞ自己の死後の安樂を得んとする願望を滿足することに「すくひ」と云ふ言葉が用ひられて居るやうでありますが、さう云ふのは眞實の宗教であるまい、と私は思ふて居るのであります。

こんな事を申しますと、平生の說教とは少し樣子が異ふと思はれませうが、併し、私はハツキリ中上げて置きます。私は飽まで、親鸞聖人に据つて申し上げます。親鸞聖人には「すくひ」と云ふことはありません。豫て私は「すくひ」と云ふ言葉に疑問をもちました。この「すくひ」と云ふ言葉位、今日まで私を支配した言葉は無い。私は八歲で母を喪ひ、十二歲の時に姉の寺に行

きましたが、私は體が非常に弱かつたので、二十歳まで生きられたら結構だ、と言はれた位でした。それで始終〇〇と云ふ和上に就て法話を聞きました。「すくはれたい〳〵」と云ふ考へで、一生懸命聞きましたが、併し、さうして「すくはれたい〳〵」と思つたが、ドヾノツマリ安心するとか、決定するとか云ふことはできませんでした。自分は悪い奴であるが、阿彌陀様のお慈悲によつて往生す――そんなお説教は、何千遍、何萬遍聞いたものか知れませんけれども、どうしても最後の滿足は得られませんでした。

大阪の津村別院に求道會と云ふ聞法の會があつて、私に暫らく預かれと云ふことで、預かつて居りますが、いろ〳〵な人がみえる。この間も私は居るかと云ふて手紙が來たので、居るからおいでなさい、と電報を出して置きましたところ、手紙が來て「御案内を頂いてお伺ひしようと思ひましたが、昨晩、咯血をした爲めに、主人は行くなと申しまするし、こんな體であなたの前へ出られませんから……」と、ズツと書いてあり、結局「いま肺病で死にますが、主人は、お前は疑ふからいかぬ、なぜお慈悲を疑ふのか、おまかせすればいゝぢやないか、かう言ひますけれども、幾らさう言はれても、私は疑へてなりません。お慈悲が信じられません」と云ふことが、繰返し〳〵書いてあります。私もこの主人のことばのやうなことを何べんもくり返し聞かして頂き、またこの女のやうな世界を、グル〳〵と長らく彷徨してゐた。姉の寺から教校と云ふ、佛教の學校へ通ふ間、毎日のやうに、それを繰返してゐたが、どうしてもすくはれぬ。甚しきは或晩の如き、寢て居りまするとき、蓮如様がお厨子からお出ましになつてお前だけは、必ずすくふてやる」と仰せになつた。翌朝になるとそれは夢であつた。夢ですくはれたのではものになりませんそんな風で私は「すくひ」と云ふことに就て惱んだ。未だに「すくひ」と云ふことばかりが、始終頭の中を往來して居るので、この「すくひ」と云ふことをどうでも一遍片付けて了はなければ夜も眠られぬやうな氣持になつて居ります。

慈悲のすくひと本願のすくひ

そこで「お慈悲ですくはるゝ」と云ふ心もちを解剖して見ると、皆さん、よく考へて御覽あそばせ。「お慈悲ですくはるゝ」と言ふて居るその心持は、それを突き止めて行つてみると、お慈悲と云ふものは自分をすくふ道具であつて、自分の往生淨土と云ふ欲望を滿足させる爲めのお慈悲であつて、つまりお慈悲は、自分の欲望を遂げさせる材料にすぎない。「お慈悲〳〵」と言ふて居

るが、如何にもお慈悲は尊いやうだが、それは、自分を極樂詣りさせて呉れるお慈悲であつて、結局お慈悲は利用されて居る。吾々のすくひの道具として利用されて居ります。それで「すくひ」と云ふ言葉ぐらゐ複雜で說明、領解しにくいものはないと思ふ。簡單にこれは口に上すべきことばではないと信じます。

ところが、有難いことには、淨土眞宗は本願の宗敎であります。一體、お慈悲によつてすくはるゝといふことは親鸞聖人の體驗、すなはち淨土眞宗にはありません。

たとへば子供が病氣をして居る、お祖母さんもお母さんもお慈悲を有つて居るが、祖母は無力ですくへない。然るに母はどこまでも救ふといふ願を起し、醫者へ行つて藥をもらつて來るといふ行を全くし、名號といふ藥を服ませる、そこではじめて子供がすくはるゝことになるのであるしかしこれは喩へでありますから一部分しかあらはせません。病氣のすくはるゝのは肉體、すなはち外的のものでありますから、この喩をもつて宗敎的のすくひはあらはせませんが、こゝでは慈悲と願行との關係をあらはして止むことに致します。

吾々の內面に這入つて來るのが本願名號で、本願名號が自己內容とならなければ、決してすくはれません。「すくひ」と云ふ言葉を敢て使ふなら……。元來お慈悲と云ふものは、救ふものゝ手許にあるものであつて、吾等の內面に與へらるべきものではない。そこで「すくひ」と云ふ言葉を若し使ふなら、淨土眞實に於ては、本願名號によつてすくはるゝと云ふより仕方がない。

親鸞聖人は「慈悲ですくはるゝ」と云ふ言葉は、少しも用ひて居られません。必ず本願名號であり、時々「慈悲」と云ふ言葉がありますが、慈悲はどこにあるかと、云ふと彌陀の手許にあるそれが吾々に迫る時、信心、本願、名號となつて廻向されて來る。それ故「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり」と仰せられてありますお慈悲だけではすくはれません。信心となり、本願名號となつて內面に這つて來るので、すくひと云へば、そこにすくひが成就するのでございませう。

一體、本願と云ふものは、どんなものかと申しますと、極めて概括的に眞宗を敎學するとして彌陀は哲學上の言葉で言へば、絕對無限である。眞實報土も、絕對無限のものでございます。これは哲學上の用語を姑く藉りるに過ぎぬので、吾々相對有限の者が、絕對無限などゝ考へると、相對界へ引下ろすことになりますから、一應、哲學上の言葉を使ふのでありますが、これを宗敎

的に表現すれば、光明無量、壽命無量の覺體である。彌陀は衆生を淨土に往生せしむるために、自らに對する誓ひと、衆生に對する誓ひとを立てられました。自らに對する誓ひは衆生を往生せしむる資格を成就するのであつて、これが光明無量、壽命無量の誓願であります。衆生に對する誓ひはすなはち大悲の誓願であつて、第十七、第十八の本願と名號であります。この光壽二無量の覺體が衆生を往生せしむる爲めに衆生にはたらきかけるのが本願名號であります。この佛心が本願名號となつて、衆生の心中に廻向し實現して來るところに、謂ゆる本願の宗教なるものが成り立つのであります。

で、本願と云ふものは、どう云ふものかと申しますと、かなりむつかしい事を申さなければなりませんが、本願と云ふ事を申す前に、少しく道寄りしませう。一體、來世とか未來とか、後生とか申しますが、これに四通りございます。この四通りをゴシヤ〳〵にするから、それで間違ひが多いやうです。私は來生と云ふ事に就て多少考へ、古今東西の來世思想に關する文獻を、大分調べました結果、四通りにわかちました。

來世思想の四種

第一の來世思想は、死ぬ事が恐ろしい、もう餘命も少なくなり、いつ死ぬかわからぬが、死んでも死なぬやうにと云ふところから、極樂へ往きたいと云ふので無量壽を願ふのですが、これは長生して居ればいゝと云ふのであります。死ぬのが恐いから極樂へ往きたいと云ふのです。これは自己の延長でありますが、この個我の延長擴大をのぞむ心を我執と言つて佛敎では嫌ふのであります。

また死後に安樂を求める。極樂世界は樂な所だと思ふて居るから、極樂へ往きたいと思ふが凡夫が樂みとするやうな所は佛の淨土でない。淨土は如來の願心によつて莊嚴された所である。凡夫は凡夫の境界相應の幸福、快樂を頭に置て、結構づくめ、樂しみづくめなどゝ言ふが、眞實報土は、そんな所でない、さう云ふ考へで淨土を願ふのは、これは一番下等であるが、實際、これが最も多いやうであります。

第二は、ソクラテスとか、プラトーンとか、カントとか、ゲーテとか、かう云ふ人々は、皆來世を言ふて居ります。これらの人々は皆、道德意識が高いから、何んとかして自分をよくしたいと考へます。ところが、この世では到底高い人格の完成は、周圍に煩はされてできにくい爲に、

來世に於てと云ふので、理想の高い人は大抵皆、來世思想を有つて居ります。カントなど、外的の神を亡ぼしたやうな理性の鋭い人にして來世思想をもつて居ります。プラトーン、ゲーテなどもさうであります。

第三のは聖道門の修行であつて、三僧祇百大劫の修行をして佛にならうといふ人は皆、それであります。

次に第四ですが、この第四を言はぬと、本願がわかりませんから、ちよつと道寄りしたのですが、第四は、捨此往彼、もしくは欣淨厭穢と云ふので、こゝを捨てゝ彼處へ往く。こゝと云ふは現實人生です。彼處と云ふは理想光明土である。淨は淨土で理想光明の世界、穢は現實人生、及び自己内容であります。現實人生は、哲學上の言葉では、經驗生活で、これは食つたり、寢たりする生活であります。これを宗教的に表現すると、貪慾、瞋恚生活であります。物が澤山欲しいと云ふところから、何か物を集める。うまく集まると機嫌がよいが、うまく集まらぬと腹を立てる。かう云ふ生活は我執の動物生活で、それを現實人生と云ふ。意義無き、價値無き生活であります。これでは人間は一生を擧げて、たゞ食つて寢るそれをたゞ上手にやるか下手にやるかと云ふことだけで終つて了ふことになります。人生へ何をしに生れて來たか、意義無き、價値無き生活を、自分は今迄して居つた、それのみならず、この貪慾瞋恚によつて創り出さるゝものは、憎み、ねたみなどいふ恐ろしい心の相である。かういふ心の生み出す果報が恐ろしい。これは迷ひであつたと、自分のやつて居つたことが迷ひであつたと知れて來たのは、迷ふて居るところの者に、迷ひなき世界から、光がかゞやいて來たのであります。すなはち喚聲であります、

世間往々、親鸞聖人の往生と、聖人以前の往生とを混同して居るやうでありますが、聖人は即得往生をこの世のこと、すなはち今日の今であるとせられたことを知らねばなりません。これは大切なことであります。これでこそ淨土眞宗が全人類的のものであり、將來の人類のたましひを救ふことにもなるのであります。

往生は本願にあひ、名號を聞くその時であるとすれば、こゝから彼處へゆくといふやうな平面的な、空間的なものではありますまい。今生きてあるまゝ「生」の意味のかはることでありませう。生き方が違つて來るのでありませう。今生きてゐたものが本願名號によつて統一されて、生かされてゆくのでありませう。やさしく言へば大悲の御心に導かれて生きてゆくのであります。

それは現實人生を五濁惡世、火宅無常の世界と償値的に否定し、この自分を煩惱具足の凡夫と價値的に見かぎつたときに、その否定せしめ、見かぎらしめたものに攝め取らるゝのであります

この「生きる」といふことの意味が變るのが、此處をすてゝ彼處に行くといふのであります。それは今かうして居るわれ〳〵の心の中に於て行はるゝことであります。穢を捨て淨を欣ふといふもこれであります。

自己と現實人生との價値を否定することが、それが捨てるのです。捨てるといふことによつて直ちに往つて居ります。

かやうに往生の「往」は捨此往彼であり、生はうまるゝであります。佛教では刹那々々に古き自己は死んで新しき自己が生れることゝなつて居ります。親鸞聖人の前滅後生といはるゝのもそれであります。信心を頂いたとき、前念に命が終つて、後念に即ち生るゝと仰せられたのもそれであります。新しき自分が生れるのであります。今までは自分の心で、自己を生み出してゐたものが、本願によつて自己が生み出され、創り出されてゆくことになるのを申すのであります。つまり今まではタダの人間であつたのが念佛の衆生となり、信心の人となるのであります。ありがたいことであります。念佛の衆生こそ攝取せらるゝものであり、信心の人こそ護らるゝのであります。かういふ人こそ本願名號に導かれて「臨終一念の夕大般涅槃を超證する」のであります。

「生きる」といふことの意味が變るといふことは、このお話を最後まで聞いて頂けば自然にお分り願へることゝ存じます、ともかく自分の「はからひ」によつてのみ生きてゐたものが、大きなお「はからひ」の中に生きさせて頂いてゐることをお知らせにあづかるのでありますから、これほどありがたいことはありません。

往生淨土の意義

阿彌陀經には、極樂は十萬億土の遠い所にあると記されて居りますが、觀經には、こゝを去ること遠からずとあります。こんなおかしな話はない。が、これでこそ淨土です。なぜなら、理想の世界は限りなく高い所です。自分は今迄は、この身は貪慾、瞋恚の塊だと思はないでゐたが、これを迷ひと知つた時、その迷ひを眺めてみると、迷ひの深さは限りがない。貪慾、瞋恚の塊である、私は朝から晩まで、地獄、餓鬼、畜生の生活をして居る、眞實報土は遠い。とてもこんな

者は、そんな所へは參られぬ、と自己の價値を否定した時、眞實報土は我内面に迫つて來て居るのです。自己否定、即ち頭が下がるその時から、それが眞實報土に向ふのでございますから、それで、高い、無限に高いものであると同時に、吾々にピタッとくッついて居るのであります。石泉僧叡師は、お淨土は吾々にはたらきかけて來る、と云ふて居られますが、それでこそ吾々迷ひの衆生が、自ら迷へりと知るので、何が有難いと云ふても、これ位有難いことはありません。親鸞聖人が「有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にあそぶなり」と御和讃にお示し下されてあるのはこゝです。體はこゝに居るが、こゝを火宅無常の世界と痛感する時、心は最早や眞實報土に向つて居ります。淺間しいものでございますと頭の下る時、心はお淨土へ向つて居るのでございます。「往く〳〵」と申しますから、向ふに往くやうに思ふけれども、前申す如く、方向が變るだけです。欲生と云ふことは、吾々が眞實報土へまゐりたいと願ふ心であるが、眞實報土へまゐりたいと云ふのは、自己の快樂を希ふ爲めでなく、このそらごと、たはごとの世界、この迷ひの世界を、迷ひと知る時、眞實報土へと自然に向はしめられて居るのであります。

これはもう少し詳しく言はぬとわからぬやうですから、迷ひと云ふことに、ちよつと觸れて置きませう。迷ひの本質は欲望でありますが、その欲望の内容をたづねると、何か向ふに幸福をえがいて居り、かうなつたら仕合せを得らるゝであらう、かうなつたら、あゝなつたらと思つて居りますが、これこそ仕合せと思ふて掴んで見たら、幸福はすぐ消えて了ふて、新らしき苦痛が生れて來る。つまり幻影を追ふて居るのです。娘を嫁入りさせたら安氣になる。と母親は思ふて居るさて、嫁入りさせたら、本當に安心するかと云ふと、夫に可愛がられて居ればよいが、姑さんの氣に入つて居ればいゝが、と、また新らしい苦しみが生じて來る。で、これこそ幸福と云ふものを掴んだら、それは幻影である。また幸福は苦痛の母親である。長らく人生を御經驗なされた皆さんは、御承知でありませうが、これこそ幸福と思ふて得たものは、屹度、苦痛の種子であつて幸福々々と思ふたものは、それこそ虛妄の幻影である。一つの欲望を滿たしたと思ふとまた新らしき欲望が生れて來て、また幻影に惑はさるゝのである。さうして一生幻影を追ふて進んで行くのが人間であります。諸行無常が人生の實相であります。これはお釋迦樣も、ショーペンハウエルも、さう言ふて居られます。その一生虛妄の幻影を追ふてゐたのを、あゝ今までは間違ふてゐた「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まこ

とあることとなし」と、かう知らして頂いたのは、それは眞實報土からの呼び聲がとゞいたのであります。

本願の實現過程

この自らを否定する力は何處から來るか。主觀は主觀を照らさず、目は目を見ざる原理によつて、煩惱具足の凡夫は決して自らの煩惱具足を知りません。この煩惱具足が、自らを煩惱具足と知るとき、煩惱具足から一あし離れて居ります。惡人が惡人と知つたとき、善に一あし近よると同じことであります。それは善のはたらきであります。今、煩惱具足の自らを煩惱具足と知つたとき、現實に本願に遇ふて居ります。モツとハツキリ申しますと、例へば、氣狂ひになつた人が俺は氣狂ひであると知れたら、正氣に遇ふたのであります。俺は氣狂ひであつたと云ふことが、本當に知れて來て「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなし」と、かう知らされましたが、それが本願に遇つたのであります

それは親鸞聖人の

煩惱具足と信知して

本願力に乘ずれば

すなはち穢身すてはてゝ

法性常樂證せしむ

といふ御和讃にはつきりと示されてあります。これが淨土眞宗であります。

法性常樂のみやこから、如來のよび聲が本願力となつて吾等の心の中へ、內面へひゞいて來るとき、かならず「煩惱具足の凡夫でございます」といふ感じが起ります。元來煩惱ばかりで出來たしろもの、即ち煩惱具足の凡夫は、自分を煩惱具足と知る眼も智慧もありません。その自らを知るはたらきが本願力であります。故に煩惱具足と信知することが直ちに本願力に乘ずることであります。かゝる幸を得たものゝみ此度かぎり、この有漏の穢身をすてはなれて法性常樂のみやこに歸らせて頂くのであります。それで本願といふは、死んでから遇ふ本願でない。死んでから本願といふ電車に乘つて極樂へ往くやうに考へてゐるのは、それは大間違ひです。そんな死んでからお目にかゝるやうな本願なら、それは片輪の本願であります。本願は根本志願でございますから、吾々の內面に這入つて來る。法性常樂の都から吾々の心の中へ這入つて來て「煩惱具足の

凡夫よ」と喚び給ふのが本願でございます。だから吾々の心の内側に喰ひ入つて離れぬものであります。でありますから、氣狂ひがすくはれる……といふはおかしな言ひ方でございますが氣狂ひが「私は今までは氣狂ひであつた」と知る、この目覺めこれが私は宗教であると思ふ、目覺めです。「すくひ」と云ふ言葉は、どうも當てはまらぬ。これを「廻向」と言ふたらいゝでせう廻向とは移入であり實現であります。本願が我等の内面に入りて新しき主體となる。それが廻向であります。「大悲のゆゑに涅槃に住せず」涅槃界から吾々のこの煩惱の中へ這入つて來て、即ち廻り向ふて、煩惱具足の凡夫と知らせ給ふ、それが本願です。

もし全く功利主義をはなれた、自己の欲望を本意とせぬ眞實の宗教とはどんなものかといへばそれは必らず高き理想の境界からの光が現實界に入り來りて、これを照らし、これを否定して、かの理想界へとこれを引ぎ上げてゆくことであります。これがすなはち廻向の宗教であり本願の宗教であります。

すなはち我々の迷ひを見るに堪えずして、無始よりこの方この世まで、あはれみまし〳〵て迷ひの凡夫よ、空しく幻影を追ふて居るのでないか、日々三惡道へ歸るのでないか、と吾々の中へ這入つて來て、本願が目覺まし給ふのであります。「曠劫多生のあひだにも。出離の强緣しらざりき、本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし」實に有難いことでございます。この現實人生を、そらごと、たはごとと知らして頂き自らを地獄必定と知らして頂いた以上、もうすくふとか、すくはぬと云ふことは超えて了ふて、たゞ仰いで眞實報土の如來の喚聲を聞くだけである。頭を下げて、さうして生々世〻の初事に、こんなものをと、如來の御前に坐つて、自己の淺間しさをあやまりはてるばかりだと思ひます。親不孝の子供は、本當に不孝者なら、自分の事を、親不孝だなどゝ思やしません。不孝を不孝とおもひません。それが、親心が子供の中へ這入つて來ますと、「あゝ自分は、親不孝である」と云ふことが、不孝者にわかりますから、「不孝ばかり重ねて居ります」と、この頭が下がる。子供の惡をそのまゝ許して見すてゝおくならば大悲の親ではない。あくまでも罪を知らしめて頭を下げさせるのが、どこまでも付いてはなれぬ親心であります。その頭の下がることに於て、親心とひとつになつて居りますから、もうすくふとか、すくはれぬと云ふやうな他人行儀は、そこには無くなつて了ふ筈であります。

但し親にさへあやまればよい懺悔すればよいといふのは、本當の懺悔ではありますまい。月感

師のことばに「耻しく、かなしく、是も慚愧、歡喜は信心の中の大用なれば最もありがたき御こゝろなり。さりながら慚愧ありと思ふは眞の慚愧にあらず、これ自力の機を以て他力の德を覆ふなり。慚愧はたゞ慚愧なるべし、歡喜はたゞ歡喜なるべし、皆これ信心の用なり」とありますのをよく〳〵味はして頂きませう。

かう云ふ話は兎かく誤解が多く、ことに深い精神的の要求から出發しない人には誤まられやすいのです。私もこれをお話するのに難儀をして居るので、どう云ふ風に言ふたら、皆さんにおわかり頂けるかと思ふて居ります。多くはこゝまではおつしやる。それは「本願の鏡に照らされて自分の惡さを知るのである」と。本願の鏡に照らすと云ふことは、それは譬です。成程、鏡にかけて顏は見えますが、心は物ぢやありませんから、鏡にかけると云ふやうなことは無い。だから本當を言ふと、私達は、どんな鏡にかけやうが、どんな事をしようが、こんな者が、自分の煩惱具足を知る道理は無いのです。迷ひの凡夫が迷ひと知ると云ふやうなことは決して出來ない。氣狂は氣狂と知らない如く、自分の罪業深重は自分では、わからぬ。それが罪業深重とわかるのは迷ひの凡夫の中に這入つて來た、本願自身のはたらきなんです。本願が私の中へ這入つて來てさうして、その本願がはたらかれるのであります。どうもこゝは、ちよつと話がしにくい……例へば、前に言ふたやうに、不孝者が「不孝を重ねて居ります」と頭を下げたのは、子供が下げたやうでございますが、さうでなくて親心の實現活動であります。親心そのものがあらはれて居るのでございます。その親心のはたらき、本願のはたらきといふても決してむつかしいことではなく、實際生活としてはたゞ、吾々は如來の前に跪き合掌禮拜して、煩惱具足の凡夫でございます淺ましい者でございます、と、頭を下げて念佛するだけであります。それ以上の仕事をしようとしても、何もできる者ではないのであります。それも本願の力でさせて頂くのです。

しかしその全自己をあけて、合掌禮拜し念佛して居る無意識の奥には、やるせなき大悲、攝取してすてたまはぬ大願業力を感じ、往生淨土の志願滿足をよろこぶ心がほのかにあるのであります。このほのかなるものが大きなもので、力强いものでまた深いものであります。

利用價値と本質價値

一體、この人間と云ふものは、利己主義なものでありまして、大抵のものを、自分の爲に利用しようと云ふ考へが、離れにくいものであります。すくふとか、すくはるゝとか云ふことも矢張

りどうしても利用的である。佛力を利用するとか、願力を利用するとか云ふ風に、利用し易くなるが、その思想が、親鸞聖人だけは更にない。親鸞聖人の御書きになつたものを拜見しますと、それが更に無い。

利用する場合は必ず出來上つたものを利用する。今茲に一杯の水を頂いても、この水をこゝまで持つて來て下さると云ふ勞力の外に、天然自然の惠みなどが、この一杯の水の中にこもつて居ります。一杯の御飯を頂くのにも、たゞお腹が減つたから、ふくらすと云ふのでなく、この御飯の中には、どれだけお百姓さん方の勞力が這入つて居るかわからぬ、天地の惠み、十方衆生のお蔭なくしては、一膳の御飯も頂けない、と考へなければなりません。吾らは本願を信じ、念佛を申すと言ふが、出來上つた本願、念佛を利用しようとする。法藏菩薩は後ろに隱れて、十劫正覺の彌陀だけを抽き出し、その彌陀を向ふに置て、それによつてすくはれやうとするから眞實のすくひはなか〳〵成り立たない。彌陀を向ふに置て、こちらからたのむといふ方法では、本當には彌陀には遇へない。遇はうとすればする程却つて彌陀と離れる。信じなければならぬと言つて行けば行く程、離れて了ふ。彌陀を向ふに置いてその彌陀をたのむことによつてすくはれやうとするのは、それでは彌陀が他人になるから、いつまで經つても駄目です。

「お前はどう聞いて居る」と尋ねられて「私は本願を信じ念佛を申して居ります」と答へると「お前の御領解は下關へ行つて居る息子に、母親が着物を送つてやつた。着物は着たが親心は貰はなんだ」と同じことだと言つた、あの讃岐の庄松の話が思ひ出されます。吾々は「本願を信じ念佛を申す」と言ふが、成程、本願を信じ念佛を申すほかに往生の要は無い、とお示し下されてありますから、吾々はそれを信條としなければなりませんが、それを私はして居ると言ふた者に向つて言つた、いまの庄松の言葉は、大いに味はふべきです。その時のその人の物の言ひ振から、さう云ふことが察しられたのでありませうが、よく考へると「本願を信じ念佛を申して居ります」と云ふは、おかしな話です。なぜおかしな話であるか。私は本願を信じ念佛を喜んで居りますと云ふても、その本願を信ずると云ふやうなことは、本當に本願が信ぜられたら、念佛を申すだけでありませう。彌陀は本願となつて我等の心の中に入り、念佛となつてあらはれたまふ。地獄必定の汝はたゞ我名を稱へよ、と云ふ、かう云ふやるせなき喚聲が聞えたら、たゞ念佛申すだけであります、お腹の空いた子に、乳を呑めと言はれたら、チウ〳〵呑んで居るだけで、呑んで居り

さへすれば親心に契ふ。我名を稱へよが本願のよび聲たらば念佛申すより他に仕方はない。それを「本願を信じ念佛を申して居ります」といふて居るのは「乳を呑め〳〵」と言はれて「呑んで居る〳〵」といふてゐるのと同じである。それは喋つて居るのであつて、呑んでゐるのではない。

利用する場合は必ず對立して居ります。彌陀と自分とは、はなれてゐる、それは外的の佛であります。自分がこゝに居つて、こゝで彌陀をたのまんならん、信ぜんならんといふのは、それは外的のすくひを求めるのであります、利用價値として、彌陀は存在して居り、吾々はそれを利用しようとして居るのであります。しかし眞實、本願に逢ふことができれば、いつのまにやらたのませられて居り信ぜさせられて居るやうになります。

私少年の頃、和上に訴へて「どうも聞えません」と言ふと和上は「お前など、自分の心ばかり眺めて居るが、自分の心を眺めんと、お手許を見よ」と言はれたが、今考へると、お手許と云ふものがどこにあるやら、サツパリわからぬ。どこを探してもそんたものはないんです。かう云ふのも、利用價値に過ぎぬやうであります。

現實人生と本願

然しさう云ふのは、よく宗教に似てゐて眞實の宗教ではない。そのわけは、結局、自分と云ふものを離れては駄目でありまして、あくまで自分の中へ這入り、自分の中へ沈潛して了はなければ、本願には遇へぬ。自己を離れて宗教は決してない。叩けば痛い、斬れば血の出るこの自分を離れてあへる本願でない。自己を離れてある佛なら佛でない。自分を離れてお手許を見よ、そんなものは無い。あつても仕方のないものです。離れたものは他人である。他者によりて吾々はすくはれません。これから、それをお話したいと思ひます。

で、眞實の宗教と云ふものは無論、往生淨土の志願を滿足するのでございます。しかしそれは現實と離れたものでなくて、いま私が喋り、あなた方が聞て居られる、この現實生活、喫茶喫飯のその日常生活に離れて居れば、さう云ふ宗教を語り、聞いて居るのであれば、その宗教は現實を遊離したもので、それはおもちやです。

その本願といふものと我々の現實生活との關係を考へて見まするとと、元來われ〳〵の心の生活には

一、價値意識

現實人生と本願

一、功利心

一、盲目的感情

と、かういふ三つの面があるやうであります。價値意識といふは、善惡、美醜、または眞實とうそ、清淨と汚濁、かういふ風に、物なり、事實なり、また殊に自分の心の相なりを批判するこゝろのはたらきであります。元來物自體は善惡も眞假もないものであります。親殺しの勝造は親を殺しても、惡い親だから世の中の爲にならぬで殺した、おれの親をおれが殺すに何が惡いといつて、親殺しといふ天地容れざる大罪惡を認めません。然るに孝經の講義を聞いて、價値意識が生れて、どうか私を殺して下さいと言つて首をさし出しました。

この價値意識は非常に尊いもので、これあればこそ人間であつて、これによつてたゞ喰つたり寢たりの動物生活から免れて居るのであります。然るに悲しいかな、吾等はこの善惡、美醜を考へる前に損得を考へる生きものであります。これが二番目の功利心であります、嘘をいふことは惡いと知りつゝ、價値意識が働きつゝ、しかも、どうしてもここは嘘を言はねば通れぬ即ち大きな損害が來ると思ふと、ツイ嘘を言つてしまひます。

ですから價値意識には高下があるわけであります。世間普通の道德といふ程度では、口に嘘を言はぬにしても、心の中に於て、たとへば忠告したいが、いふて憎まれるより止めて置かう位のことは大して問題にいたしません。すなはち自ら欺き自ら瞞ますといふやうなことは、內面的のことには、鋭い自己批判は加へません。

最高の價値意識

ところが宗教の世界におきましては、この價値意識がズツと高くなつて、「佛」と云ふ高い理想が掲げられ、「無我」と云ふやうな理想が輝やきますと、最高の價値意識がはたらきます。本願と申すのは、この最高無限の價値意識として廻向されて來るものでありませう。これがはたらきかけますと、即ちこれに逢ひますと、今までは功利心を當り前のやうに思ふてゐたが、それが非常に醜くなる。さうして嘘を言ふのを方便であるから仕方がないと思ふてゐたのが、嘘もなか〳〵言へぬやうになる。或子供が嘘を言ふと云ふので、父親が、その子が嘘を言ふ度毎に柱に一本づゝ釘を打つた。そのうちに柱が釘で一ぱいになつたら、子供はもう嘘を言はぬやうになつたから、父親は柱の釘を拔いた、拔き終つて父が曰く「お前は、本當の事を言ふやうになつて呉れたから

俺は喜んで柱の釘を拔いたが、この釘の跡だけはとれぬよ」と。私はこの言葉がヒシ〳〵と胸にこたへます。嘘を言ふて本願に背き、如來の胸に釘を打つが、本願がはたらきかけて來ると、段々自分の、さう云ふ功利主義が厭はしくなり、たゞ大悲の前に頭を下げ通しにして、日暮しをさして貰ふと云ふことになる。これが捨此往彼だと思ひます。現實の人世を超えて、理想光明の世界に向ふのでございます。

道德の世界に於ては餘り關心せず、むしろくさいものにふたをするといふ態度で扱つてゐたものが。本願がはたらきかけますと。もう一つ大きく見えて來るのは盲目的感情すなはち「愛欲名利」です。親鸞聖人も「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑す」と仰せられてありますが、吾々は善し惡しを考へる前に、先づ利害得失を考へるが、それよりモツと先に立つものは「愛慾」です。先に立つだけに深くもあり力强くもあります。愛すべからざるものを愛し、憎むべからざるものを憎む。今まで世の中をごまかして通つてゐたが、今までは外面的にばかり眼を着けてゐたが今度は心の內面に眼が着いて來ると、人を憎んだり、妬んだり、或は愛すべからざるものを愛すると云ふことが、ハツキリわかつて來るが、それを自分はどうすることも出來ぬ。親鸞聖人は、これを始終おつしやつた。「愛欲の廣海に沈沒する」とは、本當に人生を生き拔いた人の言葉で、人生を人生すると云ふはこれでありませう。「愛憎違順することは高峯嶽山にことならず」愛すべきものを愛せず、憎んでならぬものを憎むのが、愛憎違順で、それが間違ふて居ることは「高峯嶽山にことならず」高い山の如きものである、と親鸞聖人は言ふて居られます。この愛慾を盲目的感情と言ふ。實はこれは冷めたい物の言ひ方で、盲目的感情などゝ言ふ者も實際は盲目であつて、よく自分を見ると、自分の全體が愛欲である。親鸞聖人の表現を藉りて言へば、自己の內面に横はるものは無邊の廣海であります。吾々は愛欲を有つて居り吾々は愛憎違順すると思ふて居るが、さうでなく、吾々が愛欲の廣海の唯中に漂ふて居るので、この愛慾の海そのものが自分であります。

罪惡意識の極限「宿業」

親鸞聖人の「宿業」と仰せられる言葉が、私は以前にはどうもハツキリわからなかつた。それは學問的、思想的にはわかつてゐたが、自分の實感として「宿業」と云ふは、どんなものかと思ふて居つた。ところが、この頃漸く少しくわからせて頂きましたやうにおもひます。愛欲の廣海

それは無限に廣いもので、愛欲から愛欲に續いてゐる故、どこからどこへ行つても遁れられないかうなつて來ると、我が身は茫々たる生死の海に沈んで居つて、出離の緣あることなしと云ふことを、しみ〴〵と感じさせて頂きます。こんなものが佛になるなど、とても及びもつかぬことでもう泥田の中に沈み込んで居ると感じられて來る。この感じを、親鸞聖人は、これは宿業であると御感じなされたらしい。どうすることも出來ぬ。幾ら道德性が、價値意識がはたらかうが、功利心がはたらかうが、善惡、損得を思ふて居ても、盲目になつて愛欲の廣海に沈沒する。氣付かずに毎日、それをやつて居るのでございます。これはどう云ふところから、私はさう云ふことを親鸞聖人の中に發見したかと云ふと、唯圓房が或時、親鸞聖人の御前へ出られた折、「唯圓房、お前は、俺の言ふことを何んでも聞くかとおつしやつた。すると唯圓房は。「どんなことでも聞きます」と返答された。「それなら人を千人殺して來いさうすれば往生は一定する」と聖人が言はれると、「千人どころか私は一人も殺すことは出來ません」と唯圓房は申されました。そこに親鸞聖人は、奥深く本願に照らされた自分を見てゐられると云ふか、本願が親鸞聖人に這入つてゐたからと申さうか。「お前はいま、俺の言ふことを何んでも聞くと言ふたが、人を千人殺して來いと言ふたら、私は千人どころか、一人も殺すことは出來ませんと言ふ。これで知るがよい。何ごとも心にまかせたることとならば、往生のために千人殺せと言へば殺すであらう。併し、一人をも殺す業緣なきゆへに殺さぬのだ。自分の心が善くて殺さぬのではない、如何なる宿緣に催されて人千人殺すまいものでもない」とこゝまで自分の宿業を見て居られます。人を憎む心は、人を殺す心である。吾々は如何なる宿緣に催されて、人を殺さないものでもない。さうして、かう云ふ言葉があります。私はこの頃、この言葉が如何にも身に滲みます。「兎毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなし」かう親鸞聖人は仰せられて居りますが、これを讀む度に、實にしみ〴〵と身にこたえて來ます。これはおどろくべき宗教文獻でありますその自己を批判することの鋭さ、嚴肅さ、宗教感情の高さ、深さ、恐らく比び少きものでありませう。宿業。實に親鸞聖人の御一生は宿業をなげくといふ宗教的大事業の連續であります。

親鸞は、なすまじき事をせぬやうに出來るか、言ふまじき事を言はぬやうに出來るか、思ふまじき事を思はぬやうに出來るかと云ふと、それは如何することも出來ない、と自ら投げ出して「惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり」と言ふて居られます。一方に於ては善惡のふ

たつ、總じてもて存知せざるなりと言ふて居られ、また「よしあしの文字をもしらぬひとはみなまことのこゝろなりけるを善惡の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり」と言ふて居られます。矛盾した言ひ方のやうですが、この善惡の二つを超越した境地まで行つたものが何故に「惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり」と云はねばならなかつたか。あゝいふ高い宗教的人格になりますと、かういふ矛盾はしば〳〵あるやうであります。そこに高く深く宗教性がはたらいて居ります。矛盾の中に自ら統一があります。無上涅槃、眞實報土の理想が、高くかゞやけばかゞやく程、自分の極惡深重が見えて來ます。モツと甚しき表現になると「定聚の數に入ることを忻ばず、眞證の證に近づくことを快しまず耻づべし傷むべし」と、そこまで自分を見て居られる。そこまで本願がかゞやき働いて居ります。

それでありますから、こんな話をするのはほかぢやありません。先程申しました利用價値と本質價値と云ふことをお話せんが爲めに、かう云ふことを言ふて來たので、吾々は本願によつてすくはれる、と申しまするが、その本願と云ふ物體的なものがあつて、自分はそれにすくはれて極樂へ往くと云ふなら、全く本願が利用價値になります。

かくして本願に遇ふ

ところが、親鸞聖人の本願は、どうなつて居るかと云ふと、

そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

と申されて居ります。これは始終、皆さんの御聽聞になつて居るお言葉でありますが、これがこのお話の中心でございます。このお言葉の前に「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」かう云ふ痛切な言葉があり、それにつゞいて「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを……」と云ふ、このお言葉があります。で、本願にどこで遇ふのか、これを今日はお話したい。「そくばくの業をもちける身」と云ふは、銘々何程かの業を有つて居ると云ふのでなく、限り無き業を有つて居ると云ふことで、その業はなんによつて發見されたかと云ふと、私は恐らく愛慾の惱みだらうと思ふ。盲目的感情で、思ふまじき事を思ふ。その罪を犯す度に苦しみ惱みが起り、そこにかぎりなく業を感じたためにかう言はれたのでありませう。かう云ふ業を有つて居る身を「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」かう

云ふ風に書かなければ書けぬから、かう書かれたのである。

吾々は宿業を感じますと、自分と自分で「どうもならぬ奴だ」と、自分と云ふものに愛想が盡きて、自分と云ふものに失望するのでありますが、吾々が自分で愛想をつかし失望する前に五劫の思案に於て、もう失望しつくして居られる――奈何とも出來ない奴だ、と失望しつくされて居る「彌陀の五劫思推の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」で、この私の業をかゝえて五劫の間考へられた。それで、自分の業を見ることに於て、本願に遇ふのです。自分の業の感じの中に本願が這入りこの業を背負ふて居りますから、自分の業を感ずることによつて、本願に遇はなくては遇へない。必ず自分の業を悲しむ感情の中に本願があつて「罪業深重の凡夫よ」と喚ぶのでございます。「喚聲々々」と言ふても、それは外的に聞えて來るものでは無い

本願と云ふものは、出來上つたものを利用すると云ふやうなものでなく、本願は吾々の內面へ必ず這入つて來る。法性常樂の都から、如來の心は大悲本願となつて、吾々の內面まで這入つて來て下され、吾々を煩惱具足の凡夫よと喚び給ふのであります。この邊は洵にお話がしにくいのでございます。とても言語によつて表現が出來ないのです。

例へば、親鸞聖人が、あの源信僧都の和讃に於て「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし」とおつしやつた。かう言はれたのは、本願が言ふたのである。極惡深重の衆生よ、他の方便は更に無い、と本願が言はれなければ、親鸞聖人には言はれない。極惡深重の衆生よ……と本願が喚んだのである。

喚ぶと云ふことはどう云ふことか。喚ぶと云ふは見ることです。悲しむことです。もと〳〵衆生を離れて如來はあるわけはない。煩惱具足の凡夫を離れて本願があるわけはない。衆生は彌陀によつて見られた名である。泣かれてある名である。吾々は「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし」と自分が言ふて居るやうであるが、それは本願が喚んで居るのである。かうなると私は人間の言葉で表現することを知りません。衆生を離れた彌陀もなく、彌陀を離れた衆生も無い、本願を離れた衆生も無く、衆生を離れた本願もない。私が「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生」と言ふた時は、すでに本願によばれて居るのであります。むしろ本願の呼び聲が、我々の心の上に「極惡深重の衆生は、他の方便更になし」となつて現はるゝのであります。

喚んだ以上は離れて居るのでない。……どうかして、これをわかるやうに言ひたいが、結局本願の中に自分を見いだし、自分の中に本願を感ずる。自分を離れてある本願では無い、「凡夫よ」「衆生よ」とは、本願が喚んで居るのである。彌陀の本願によりて本願されてあるものが私共で、極悪深重である限り、煩悩具足の凡夫である限り本願は私を離れ給はぬ。本願の中に自分を見るのである。自分の中に本願に遇ふのであります。こんな事は信仰と云ふことではない。何んと名づけていゝかわからぬ。體驗と云ふか、「感じ」と云ふか、どう言ふてよいか、それは自分の起したものでなく、本願によつて起さしめられたものであるが、親鸞聖人の御體驗も、要するにかうであらせらるゝと思ふ。自己の内に本願に遭ひ、本願の内に自己を發見する、それよりほかに宗教は無い、と私は信じさせて頂いて居ります。

でありますから、結局、信ぜねばならぬ、賴まねばならぬ、すくはれねばならぬ、と云ふやうな阿彌陀様は外的にあるのであつて、それは利用され易い。ところが、私のいま感じさせて頂いて居る勅命は――勅命などゝ言ふと、そのまゝ來いよの喚聲であるから、私は救はるゝと云ふことになれば、それは勅命の利用である。出來上つて居ればこそ「そのまゝ來い」と言ふのであるが、さうでなく、その喚聲を摑まへるのでなく、このやうな私を喚ばずに居れぬ親心に這入つて行くのです。このやうな私の爲めに、本願を建てさせられざるを得ざる親心に這入つて行つた時本當の本願の主に遇ふのである。私を喚ばざるを得ぬ親心に這入つた時、親心の中に自分が居るのである。だから、結局、本願の内に自己を見、自己の内に本願に遭ふと言ふより、表現の仕様がないのです。どうも巧まく言へませんので困りますが、この所は、皆さんの方に於て御推察を頂くより、仕方が無いのでございます。

本願に生くる

そこで問題は、それならお前は本願を信じて居るか、本願に隨ふて居るか、と云ふことになりますが、一體言ふと、また誤りを擧げるやうになりますが、本願によつて極樂へまゐると云ふ考へと、本願によつて生かされて行くといふ考へと二つあることを知らねばなりません、親鸞聖人はどこ迄も、本願によつて生かされて行かれました。で、吾々は、本願によつて創造され、統一されて生かされて行かなくてはなりません。ところが、死んだら御本願によつて、極樂へまゐらして貰ふ、と云ふ風に聞いて居る人が多いものですから、或るところでその事を申しますと。「私

は三十年聞いて居つたが、そんな事は聞き始めだ」と云ふ人もありました、

この間も廣島へ參りまして、ある信者と話して、「本願によつて極樂へ往かうと思つて居るのと、本願によつて生かされて行くと思ふて居るのと、かう二いろありますが、吾々は、本願によつて生かされて行かなくては、生きて行けませんなア」と私が申しますと、その方は、「本願が無くて生きて行かれますものか……」と、しみ〴〵力強く言はれた。その時、私はその言葉を聞いてホロッとしまして、機類は樣々だ、この方は盡未來の果までもの御同朋だ、珍らしいナアと感じた次第です。親鸞聖人が「本願力にあひぬれば」と仰せられたのは、現實の今でありますが、今、本願に遇ふものは空しく過ぎず、本願に導かれて決定して報土の往生を遂げるのです。本願によつて極樂へゆくと思ふて居るのは、死後に逢ふのであつて、今は本願にあふてはゐないのです。

又一人感心な人がありました。その人は眞言宗もやり、基督教も三年ばかりやり、いろ〳〵の事をやつて、さうして眞宗に來られたが、このまゝのお助けといふことが、どうしてもわからぬと云ふので、それは樣々に道を求めた揚句、漸く本願に遇はれたといふのでございますが暫らくその家へ行つて、その方と話して居るうちに、本願によつて生きて行ける、行けぬと云ふ問題が出たら、「自分は生きてゆけぬどころではありません、私は一時間も本願を離れては生きて居ることが出來ない」と言はれた。それを聞いて私は、上には上があるナア、と思はず頭を下げましたが、併し、さう云ふ方に會ふてみると、悲しい哉、私は本願に背きづめに背いて居る。本願によつて生かされて行かなければならぬ、と云ふ願ひを有つて居り乍ら、本願に背いて居る者である。さり乍ら、私は自分免許であるが、本願に背くものが無かつたら、本願は役に立たぬ。本願に背くやうなものは、念佛をするより仕方ない。本願に背いて居ります、と謝まつて念佛することによつて、本願に遇ふのでないかと思ふ。實際に、私は本願に背きづめでございます。

「すくひ」なき「すくひ」

この頃、私は、親鸞聖人の「聞きがたくして聞くことを得たり」と云ふお言葉に、ポンと突き當つた。どうもおかしなことだと思つたのです。「善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり」といひつゝ「惡性さらにやめがたし」と、おつしやつたのに似て、どうも矛盾して居るやうに聞えます。聞けぬものなら初めから聞けない。聞えるものならはじめから聞える。聞えないものが

「すくひ」なき「すくひ」

聞えるといふは偶然であります。偶然は求めては居りません。そこでこのおことばほど分らぬものはありません。

これは實際問題ですが、法をきいて「今日こそ聞えた」と云ふやうなものが、皆さん、何か出來ましたか。お說教を聞いて居ると「今日こそ聞いた」と云ふやうなものができる事があるが、「その場を去るとあとかたもなし」で、實際無い、私など長い間聽聞をしたが、何も殘つて居りません。腹の中には無明長夜の暗があるばかりであります。

「なぜ聞いたものが碎けるだらう」……私は、それをかう云ふ風に考へました。嘗て、犬養毅氏が、かう云ふことを言はれたと云ふことです。「あんな奴に幾ら言ふてきかしても、鹽壺にめくぢをほうり込むやうなもので、何んにもならん」と、皮肉屋の犬養さんの言はれさうなことです。矢張り私が法を聞くのも、鹽壺の中へなめくぢをほうり込むやうなもので、直ぐ消える。煩惱惡業の鱗が、折角聞いたところの、うづ高い法を喰つて了ふのでないかとさへ思はれる。私の聞法の同朋で、伊勢にオスワさんと云ふ人がありますが、「オスワさん、近頃どうした」と申しますと、「ちよつとも聞いてくれませんで、困ります」と言はれる。ちよつとも聞きませんで困る、とオスワは言ふて居るが、併しそれは「本當に聞かんで困る、聞かしたい」と云ふ本願がはたらけばこそ、オスワのことばになつて「聞かんで困ります」と、あらはれて來るんでありませう。佛の大悲が、私の聞かぬ身を哀れんで聞かしたいと云ふのであれば、本願は絶對自由なる純粹意志であるから、吾々に聞かせることは何んでもない。それだのに、なぜ聞かせられないのかと云ふと、善導大師は「吾々はいつまで經つても助からぬやうにしてある、助かつて了ふと彌陀をたのまぬから、助からぬやうにしてあるのだ」と云ふことを言ふて居られますが、このお言葉から考へても、法が聞えぬやうにしてある。愈々「聞き得た」と云ふやうなものを握つたら、もう聞きに來ぬ、卒業して了う、さうするともう來ないから「もう聞えた」と云ふやうなものがあつても、本願が中へ這入つて、食べて了ひなさる。それで「得た〳〵と思ふは得ぬのなり」と仰しやるのです。「聞き得たりとするは未だ得ざるを得たりとする增上慢なり」といふ嚴しいお戒めもあります。「得た〳〵」と云ふやうなものを否定するところに、本願のはたらきがあるのである。本願に背きづめにして居るが、本願に背いて居ると云ふすがたを見せるところにも、本願がはたらいてゐる。本願ははたらき通しでございます。だから「聞えません〳〵」と思ふてゐたが

「すくひ」なき「すくひ」

聞かして助からぬやうにしてお置きになる。突き放したまふ本願があると思ふた時、ガクリと頭が下つた。あゝ御手數のかゝることである、斯樣にしてまで御前に引つ張り出されるのであるかと思ふて、不思議な感動に打たれました。聞きがたくして、といふは自分の聞かうとする意識の無力を語るものであり、聞くことを得たりといふは不意識界にひゞき來る本願のよび聲のはたらきでありませう。

聞法念佛に充足

結論に這入つて行きます。結局、自分の心境を申上げるに過ぎますんが、私は、かう考へて居ります。彌陀をたのむ……さういふ一つの仕事ができるかどうか、それはどんなものか。彌陀をたのんだら、「俺はたのんだ」と云ふやうなものがあるか知らぬが、もし自らの意識にたのめたといふやうなものがあれば、それは不純物でありませう。私は法を聞くといふ、たゞ一すぢの細い歩みを續けて來ましたが、顧みると、つまるところ、聞いたものは皆、奪ひ取られて何も殘らぬけれども、たゞ法を聞きたいと云ふ願ひと、念佛すると云ふよろこびと、この二つが殘つて居る。たゞ法を聞きたい。法を聞くと云ふことに一日でも離れたら、それは實際、生きて甲斐無き人生です。念佛から離れたら、それは生甲斐無きものであります。私は先日も友人の別莊に泊まつた時に、朝起きて念佛をするのは工合が惡いが出て來るから仕樣が無い、佛壇の無い所でも念佛が出るから仕方がありません。念佛せずして生きて居るなど、とても想像も及ばぬことです法を聞かずに生きて居れると云ふ位、貧しい生活はあるまいと思ひます。法を聞いて念佛を申すその他に私は何も仕事が出來ません。

實は、この正月のことでありましたが、北村さんと云ふお醫者に、齒の治療をして頂きましたこの方は私と同じ頃にフランスに留學をしてゐたので心安いものですから、治療のあと先方も話好きのことゝて、頻りに話をした。そのうちに汽車の時間が迫り自動車が來たので、それに飛び乘つて驛へ駈け付けたと云ふ風で、藥は貰つたがいつ含嗽をするのやらわけがわからぬ。その後一週間ほどして寢床へ這入りますと、夜通し寒氣がしてかなはぬのです。丁度、その家の子供さんが敗血症で死にましたが、それと同じ容態ですから、自分も敗血症か知らんと考へました。翌日になつて診斷を受けますと、敗血症になると言んです。マアなるものは何んと思つても仕方ないと考へて歸つて來た。歸つて來て段々考へてみると、自分はもう娑婆の緣が盡きた、殘つて居

る仕事はたゞ、法を聞かして頂きたいだけだ。法を聞くと云ふことだけは不思議に自分は恵まれて居る、それだから、聞法の志願だけは、彌陀大悲の本願が必ず滿足さして下さるであらう、一二週間の中には死ぬだらうが、楠正成は七生報國と言つた。私は七生聞法だ。こんな風に考へて死ぬと定めたら、それまでは不安だつたが、さう定めたら、いつの間にやらグウ〳〵眠つて了つた、そんなことで、たうとう敗血症にもならず、間もなく治つて、また、かう云ふ面を曝すやうになりましたが、七生聞法——法を聞くと云ふことより他に、私は人生に意義を認めない者であります。それでありますから、要するに、彌陀をたのむと云ふことも、法を聞いて念佛申すと云ふこと以外には、吾々には何も仕事が出來ないと云ふ事がはつきり分つたことではありますまいか。彌陀をたのむと云ふことは、無内容ではありません。何かあるのでありませう。さうしてそれは死ぬ最後の瞬間まで、法を聞き念佛をするのが。それなんでせう。

でありますから、いま私は「お前は、何によつて生きて居るのか」と言はれたら。「たゞ法にかつえて居る」と言ふよりほかはない。その法にかつえると云ふことも、矢張り本願のはたらきであると信じて居りますが、どうも纏らぬお話をして、自分の感想を述べたに過ぎません。甚だ恐れ入る次第でございますが、尠くとも宗教は何ものであるかと云ふことが、少しでもお分り頂けば結構であります。私の宗教は本願によつて生きて行くのである。本願によつてはからはれて居るので、自分の智慧、自分のはからひで生きて居ると云ふことは、少しもありません。片ツ端から本願のはたらきによつて生かさして頂くのであります。御本願のはたらきによつて、念佛成佛自然でありますから必ず眞實報土に往生出來るでありませう。しかしそれは本願名號の自然のはたらきにまかすのであります。自分としてはたゞ一生法を聞いて念佛さへ申さして頂ければ、志願滿足です。萬劫にも遇ひ難き法に、いま遇ふと云ふことは、無上の仕合せであるのに、それを棚の上に上げて置て法を聞いてどうかならうと考へるのは、それは欲が深すきる。また念佛することは親に遇ふことである。萬劫にも遇ひ難き親様に、生々世々の初事に遇はせて頂いて、それ以上求むると云ふことは、私は勿體ないと思ひ、聞法、念佛と云ふものを以て、無上の幸福、無量無邊の功德と頂いて居ります、それ以上のすくひとか、助けとかを求むる者は欲が深過ぎると私に考へるのでございます。

しかし、かう申すと自分が法をきゝ自分が念佛して居るやうでありますが、宗教の世界に於て

は、必ずせしめられて居るのでありまして、聞くといふても、聞かせねば止まぬ本願自體のはたらきであり、さうしてまたそれは眞實報土よりの呼びごえをきいて居るのであります。念佛もまた一聲も自ら稱へるのでなく、ひとへに彌陀の御催しにあづかつて念佛まふして居るのであります。

故に聞くといふても常に聞かされて居るのであり、稱ふるといふても、常に彌陀によばれて居るのであります。故に聞法念佛が、直に日々夜々、往生淨土の道であり、歩みであるのであります。

しかし、これも私の說明であつて、事實の世界に於ては、おのれを空しくして法をきゝ、せしめらるゝまゝに稱へるばかりでありませう。

最後におことわりを致しておきますが、お話し致して居るうちに、自己を否定するといふ言葉をしば〳〵使ひましたが、われ〳〵が情意の世界に於て自己を否定するといふのは、自らを恥ぢ悲しみ、傷むことであります。實際生活としまして、何もよいことのできぬ私共が、爲し能ふかぎりの善は自らを恥ぢ、悲しむことであります。惡を恥づることに於て善に一あし近よります。今の我を悲しむ、即ち否定することによりて、それより以上の自己が次に生れる道理であります

それでありますから、親鸞聖人の御一生は、自らを悲しみ、自らをなげかるゝお心もちの連續でありました。

「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑す……恥づべし、傷むべし」

この悲み、恥ぢ、傷むのが自らを否定するのであります。しかしそれは私が悲しみ、いたむ前に「佛かねてしろしめて」これを悲しみ傷みたまふ大悲が廻向されて來るのであります。

あらゆる聖者の生涯は皆これであります。十惡の法然、愚痴の法然と仰せらるゝのも徹底せる自己否定であります。この否定する大悲本願の力が直ちに攝取してすてたまはぬ、すなはち大肯定の力でありますから、誓願不思議であり、不思議の中の不思議であります。

さう申すと大さう六かしいことのやうでありますが、實際に於ては自分が自分のものでなくなつて、親樣のもの、彌陀のものとなることであり、願力不思議の中にある自分を見出して親樣の名をよぶ、稱名念佛することでありませう。

（昭和八年七月十六日信道會館に於て講話）

本願と名號

吾らの祖師は「彌陀の本願信ずべし」といふ、大きな課題を、末世の吾らに殘しておいて、大心海に歸られた。

彌陀の本願を信ずる、これほど大きな課題はない。まことにこれ一つが人間受生の本懷でありこれによつてのみ永遠の生命は獲得せらるゝのである。

それは祖師によつて「あゝ弘誓の强緣は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲がたし」といはれ、「難中の難、この難に過ぐるはなし」といはれ、「無上の妙果成じ難きにあらず、眞實の信樂、まことに獲ること難し」とせらるゝものである。

善知識にあふことも、をしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることは

なほかたしといはるゝものである。

釋尊以後第一人ともいふべき精神的偉器にして猶ほ且つかくの如く至極の難なることを歎じ告白せらるゝほどに至難なるものである。

それはまた獲がたきものであると同時に、而してまた獲がたきが故に世界一切の寶を以てしてもなほ換えがたき至極の寶である。

それは「大信心は即ちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり」凡そこれ以上の精神的の眞實功德、即ち高き價値は、斷じて世にあるべからざるものである。

而してこの淨信を獲たるものは「是の心顚倒せず、この心、虛僞ならず、こゝを以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり」とせらるゝものである。

然らばそれは何故に難いか。

第一の難は、この信なるものが、彼我對立の上に起る信とまぎれ易いからである。彼我對立の上の信といふは、彼といふ一人の他者を、我が信ずるといふ信である。

この信は、恐らくは萬劫を經とも成就せぬ信である。何となれば、彼が他者であるかぎり、彼の心なるものは我とは、離れてあるものであり、彼の人格內容として動いて居るものであるから彼一人以外には誰にも分らぬものである、

彼は笑つては居るが心では泣いて居るかも知れぬ、彼は然りと言つて居るが、否といふて居るかも知れぬ、等々。心中するときでも相手の心は分るものではないのである。

要するに「彼」の心なるものは自を以て他を揣るよりほかに仕方のないものである。

今、こゝに彌陀の本願によつて救はるゝ、彌陀の慈悲によつて救はるゝといふやうなことが考へらるゝとして、それが如何なる意識の相に於て信ぜらるゝのであらうか。

世間の信といはるゝものはかくの如きものである。

この場合、本願といはれ、慈悲といはるゝものは、他者である。これによつて我なるものが救はるゝと考へる場合、その本願、慈悲といはるゝものは、我なるものをすくふ一の物體である。それは救ふはたらきをする一の自性ある物體である。

吾らの意識は志向性をもつてゐる。そしてその志向の對象に向つて、何かを要求してゐる。自我とは釋尊によれば、渇愛、すなはち期待のこゝろであるから。

今、慈悲といはれ、本願といはるゝ物體に向ふところの、この吾らの意識は、それに對してすくひを求めてゐるのである。

その要求の前に、吾らの意識によつて描き出されたものが、この慈悲、本願である。さればこの本願、慈悲といふものによつて救はるゝとする、謂ゆる信ずるこゝろは、吾らの意識、すなはちはからひである。

かういふのを香樹院德龍師が、「これでも助かると思ふてゐるのが、はからふて居るのぢや」と申さるゝのである。

かうして、自己の外にある一つの物がらによつて助けらるゝと信じてゐるのは、慧空講師の謂ゆる自力の信である。

自力とは自我意識である。自己を主體として、自己以外のものを客體化せんとする態度である自己以外のものに主體性なからしむる態度である。すべてを自己の配下におき、利用せんとする態度である。

「自力のこゝろをすつといふは、やう〳〵さま〴〵の大小の聖人善惡の凡夫の、みづからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのまず、あしき心をさかしくかへりみず、また人をあしよしとおもふ心をすてて、愚縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」

この唯信鈔文意の文のこゝろから眺めて見ても自力の心のすたるといふは、自我意識のくだけたこゝろである。凡そ宗教の本質は無我であり（蓮師曰く佛法には無我と候）宗教するといふことは自我意識のくだけゆくことである。絶對歸依の感情、念佛のこゝろである。

自我意識とは、自己の主體性をあくまでも保つて、他を客體化せんとする態度である、然ればこの場合、本願、慈悲と云はるゝものは、すなはち客體である。それらは自我がその要求を滿す利用價値である。

この際この態度には、佛法の上に於て、最も否定さるべき實有の我執が潜んでゐる。從つて慈悲といはれ、本願といはるゝもの（客體としてのもの）は、この我執を實現せんがために、自己

の外に自己實現の具として執ぜられたるものである。

それは執によつて把握されたる物體にすぎない。

淨土眞宗に於て「他力」と云はるゝものが、この意味の他力、すなはち外他の力と解せらるゝならば、それこそとんでもないことであつて、これほどに悲しむべき誤まりはあるまい。それは道の展開弘通の沮まれる事に於ても、誤解せるその人が迷執を深めつゝ、而も救はるべしと思ふて居ることに於ても。元來他力とは祖師聖人によつて

他力とは本願力なり

と云はれ、ことに、それを具體的に表現して

信心すなはち一心なり

一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心

この心すなはち他力なり

と申されてあるもので、この願力廻向の信心のみが他力である。

これが分りかねる故に、常識では、外他の力、すなはち我なるものを救ふ力を他力なりと誤り易いのである。さういふ救ひは外的のすくひにすぎず、宗教的の意味が乏しい。

これを七里恒順師が「他力々々といふて、大抵は自力を賣つて居るのぢや」と云はるゝのであらう。

さればかゝる信は自力であり、慧空講師によつて、他力の疑なりと云はるゝものである。自己以外のものによつて救はるゝといふ場合、不安なきを得ないのは當然である。助けるものが「彼」であるかぎり、「彼」のこゝろ全部が分明でないかぎり、このすくひはすくはるゝものゝ方ですくはるゝに違いないときめておくものにすぎず、從つて、實は、「彼」とは關係のないものである。つまり自己決定である。實は助かると勝手にきめてゐるのである。

必ず助かるときめ、確信してゐると力んで居らねばならぬだけ、それは不安である。それは實は期待であるから、不安ならざるを得ない。

この不安を抑えつける爲めに自然お慈悲が高調せられねばならぬことである。

この高調せらるゝお慈悲の讃嘆によつて、感傷的な涙を流して、一時はその不安の雲も消える

がその感傷の消えかゝるとともに、底知れぬ疑惑は必ず頭をもたげる。その陶醉を陶醉と知らずして醒め際の苦しきに堪えずして、また醉を重ぬべくお慈悲の高調をきくのである。かうして迷ひを深めるばかりである。

さういふのはまた一種の自己欺瞞である。底の疑惑の暗に當面するのがおそろしく、これと鬪ふことが苦しく、それを腹底で無意識に知つて居るので、一時的の苦惱廻避の手段として、お慈悲の高調を聞いて、自らをごまかしておくのである。

まことにこれこそ眞實信心に遇ひ難き最も大いなる原因の一である。

おもふに眞實の宗教的要求の立場に於ては、慈悲の強い弱い、深い淺いよりは、信を獲たか獲ぬかゞ問題であらねばならぬ。慈悲の深淺に目のついてゐるあひだは徹頭徹尾、功利主義であり自力である。眞實報土の往生の正因は願力廻向の眞實信心であつて、お慈悲ではない。

但しこゝに、特に誤解なきやうに記しておくことは、私は佛の慈悲の否定者ではない。私はあくまでも佛の慈悲讃仰者、隨喜者である。佛は智慧慈悲圓滿の覺體でまします。しかしこの苦惱の群萠を救濟したまふのは、智慧慈悲の覺體ではなくて、本願名號である。本願が吾らに廻入して信となり（信は願より生ずれば念佛成佛自然なり）その信の表現が念佛である。されば本願を信じ念佛を申すといふ具體的現實的なる宗教經驗そのものがすくひでなければならない。

如來は智慧慈悲圓滿の覺體でましますのであるが、その悲智の方便によつて吾らに信心をあたへたまふのである。

釋迦彌陀は慈悲の父母
種々に善巧方便し
われらが無上の信心を
發起せしめたまひけり

すなはち無上の信心を發起せしめるのが、すくひである。

佛法は聽聞にきはまる。聽聞心を入れ申さば、お慈悲にてさふらふあひだ、まことの信はえらるゝなり。

まことの信の獲否が最初にして最終なる第一義的の問題である。

要するに、如上の如き宗教的ならざる要求の生れて來る根據は、死後の苦樂が問題となり、來

生に於ても、この世でさうである如く、苦を免れて樂をえたく、死後の用意とおもふて聞法するこの功利主義である。かういふ機類のねがふ極樂は、眞實報土、無量光明土ではなく、穢土の延長にすぎない。死後までも娑婆の、もしくは娑婆以上の樂しみを貪らうとする實有の我執が、蛇の蟄せる如く潜在してゐる、それの妄動である。

この實我の利便のために生み出されたものが、この他者としてある本願であり慈悲である。第二義的宗教のもつ偶像である。

おもふにかくの如き非佛教的、非宗教的なる思想が、眞宗の教への如く思ひ誤らるゝのは、宗教の要諦が反省にあることを知らぬ無智の結果である。

自然的自己の要求するまゝに人生の歩みをつゞけてゆけば、それはたゞ迷ひを深めるにすぎない。

人間は欲望の權化であり、人生は欲望の表現である。佛教者たるものが、それを肯定し得ずして煩惱と見、迷ひと見るは當然である。吾らには無我、すなはち無上涅槃の理想が高く輝くが故に。この無上涅槃の理想が、高く輝けば輝くほど現實人生そのものは生死の苦海である。いかなるものもこれを否定することはできない。こゝに出離生死の念願、これを悲しむこゝろは起らざるを得ない。これが清淨の願往生心といはるゝものである。

この清淨の願往生心はまた祖師聖人によつて「能生清淨願往生心といふは、金剛の眞心を獲得するなり。本願力廻向の大信心海なるが故に」といはるゝものである。されば此に自己及び人生から生み出さるゝもろ〳〵の要求と、それ全體を愛欲生死の染心として否定する(反省する)新しき主體との轉換(廻向)が行はれざるかぎり、眞實の宗教的要求も體驗も生み出さるゝ理由はないのである。

これによつて知らるゝ如く、自然的自己の欲望、すはなち我執が主體となつて、本願慈悲が客體化されてゐる間は、所詮すくひは、功利的(外的)である。それは苦を厭ひ樂を求むる主我的なる有の見の外道の要求である。

結論から云へば本願が主體となり、自我が客體となるところに「本願を信ずる」といふ體驗は成就するのである、廻向とは本願がわが内に入つて主體となることである。

今更ら説明するまでもないが、人間の意識には主客の兩面がある。

「おれは惡い」と意識する時、意識の中に、惡いと云はるゝ我と、その惡い我を悲しむ我とがある、この惡を悲しむ我は、善からんとする念願である、これは主體であつて、客體化されざるものである。

從來惡をなしつゝ、惡を惡と知らざりしものが、聖賢の書をよんで自らの惡を照らし出され、ここに從來の我を厭ふて、善にすゝまんとする念願が生るゝ。

これは主體性のものであるから、我が意識には把はれないが、しかも能動的のものであるから全自己を動かし、全自己に變化を與へる。すなはち常に新しき自己を創造する動力となる。是れ本願力と言はるゝ所以である、

從來物を求めて物のために煩はされ、人に求めて人のために惱まされ（親鸞聖人曰く煩は身を煩はし惱はこゝろを惱ます）全然眞實の自己を見失ふて、生死の苦海に沈淪しつゝありしものが、善知識（本願の體驗者）のことば（眞實の教）を聞いて、こゝに生死を出離せんとする念願を發す。自己を厭ふこゝろである。業の繫縛を悲しむこゝろである。

これ人生以上なるものゝ智眼が、我に於て開かれたのである。この智慧の眼によつて發見されたものが「煩惱具足の凡夫」である。

このとき從來の自己なるものゝ中に「煩惱具足の凡夫」が發見される。發見とは信知である。

煩惱具足と信知して
本願力に乘ずれば
すなはち穢身すてはてゝ
法性常樂證せしむ

この和讃によつて知らるゝごとく煩惱具足と信知したことが、本願力に乘じたことである。本願が主體となつて、自己が客體化さるゝとき、自己は煩惱具足の凡夫となる。これ照護であり攝取である。この意味ならざる照護、攝取は外的のものである。外的のものは、すべて宗教的價値をもたない。それは精神的のものでないからである。宗教は最も價値的なる精神的現象である。

五劫思惟の願なるものが、主體となるとき自己の主體性は失せて、「親鸞一人」として客體化さるゝ。この親鸞一人は汝である。本願の對象であり、內容であり、十方衆生である。

これが「さればそくばくの業をもちける身」である。このそくばくの（限りなき）業の自覺が

たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさを内感し身證するのである。この本願が、我に入り、我に於てわが業を見せしめるのである。

業を見せしめるものと、業とが、われに於て一つである。

これが機法一體の體驗身證である。

たすけんとおぼしめしたちける、そのおぼしめしのうちに攝めとられてある自らを發見するのである。自らのうちに、このおぼしめしがあらはるゝのである。

このおぼしめしのかたじけなさに感動する心の全體が、歸命盡十方無碍光如來であり、南無不可思議光であり、おんたすけ候へと彌陀をたのむこゝろであり、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつこゝろである。

これが念佛である。

念佛とは、この自我意識のくだけたこゝろ、歸命のこゝろである。絶對歸依の純粹感情である我にはたらきかける不可思議なるものゝ前に、ひれふした、己れを空しくしたこゝろである。

さればその念佛は、決して人間性から生み出されるものではない。

それはわれに廻入せる本願の名のりであり、號びである。すなはちその(本願の)現行である。

その本願の名のり（名號）を聞くのが念佛である。それが聞其名號であり、信心歡喜である。

故に名號は本願の表現に外ならない。

「誓願名號と申してかはりたること候はず、誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候」（末燈鈔）

これを本願成就の文に就て見るに、「十方沉沙の諸佛如來、無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讃嘆したまふ」とある。この不可思議なる威神功德は、諸有衆生を生死の苦海より濟度する誓願不思議である。

されば、すぐその後に、これを受けて、「諸有衆生、其の名號を聞きて信心歡喜し乃至一念せん、至心に廻向したまへり」とある、この其のは、その前なる本願である。されば其名號とは、本願の名のり、本願の表現にほかならない。

言はゞ念佛とは本願が我に於て現行するのであり、我に於て本願するのである。

かるが故に、念佛するといふは、われら衆生に入りて、衆生に於てあらはるゝ本願の名のり（廻

向）（よび聲）を聞くことである。

聞くとき、それが眞實に、宗教的の意味に於て聞くといふは、「仰せ」あつて我なき態度である。おのれは空しくなつて、正覺大音、響流十方のよび聲あるのみである。聞とは自己の否定である。

かるが故に、それは、そのまゝ、その聞く全體が信心歡喜である。

「聞くといふは、如來の誓ひの御名を信ずとまふすなり」（銘文）

「聞其名號といふは本願の名號をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をきゝて疑ふこゝろなきを聞といふなり。また聞くといふは信心をあらはすみのりなり。」（一念多念證文）

されば如來の願心の體得が信であり、その表現が名號、すなはち念佛である。故に本願を信ずるといふも、本願の名のりをきくことであり、それが直ちに念佛である。

かるが故に本願によつて救はるゝと信ずるのではなく、如來の願心を直ちに信受するのである願心自體が我に入つて、我ならぬ我、すなはち主體となつて我を動かす、これが本願を信ずると云はるゝものである。如來の願心の體得である。

故に本願を信じ念佛を申してすくはるゝのではなく、本願を信じ念佛を申すそのありだけがすくひである。

たゞしすくひといふことばを宛てはめるべく、あまりにも具體的なる現實的なる、全情意の感動であり、生命の充實感である。

それは信心歡喜といふ音樂的表現を藉りるよりほかに表はしかたのないものであり、それが至心廻向の實感であり、そのまゝが即得往生であり、住不退轉である。不退とは信心の相續、純粹持續の相である。

信は願より生ずれば
念佛成佛自然なり
自然はすなはち報土なり
證大涅槃うたがはず

（終）

昭和十一年十月十九日印刷
昭和十一年十月廿三日發行

定價 金貳拾錢

著者 松原致遠
大阪市東區安土町三

發行者 緒方利行
大阪市東區安土町三

印刷所 株式會社一誠社
名古屋市南中區千早町五丁目一六

不許複製

發行所 大阪市東區安土町三
求道會出版部

終